

茨城県立竜ヶ崎第二高等学校

(様式 4-2 : 令和 3 年度 モビリティ・マネジメント教育 (交通環境学習) にかかわる学校支援制度
実施結果報告書)

実施結果報告書

1. 学習名称: 「竜鉄」展示会・「竜鉄サミット」を通して地域公共交通の魅力を発信しよう!					
2. テーマ: 地域の公共交通の役割を考えるとともに、将来の公共交通について考える					
3. 実施教科: 政治経済、課題研究 (商業科目)、 ※ 課外活動、特別活動としてフィールドワークを実施					
4. 関連単元: 現代日本の諸課題					
5. 実施単元数: 2					
6. 学年	3	7. クラス数	3	8. 生徒数	105
<p>9. 実施内容</p> <p>① 『「竜鉄」の歴史を探る』ポスター展示会 (実施主体 竜ヶ崎第二高等学校 会場は関東鉄道竜ヶ崎駅構内)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 展示時期は 2021 年 8 月 1 日～3 月 26 日まで。展示内容の説明会を 2 回実施。12 名が参加。 <p>② 近未来公共交通システムに関する学習 (実施主体 龍ヶ崎 MaaS 推進協議会)</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) MaaS に関する学習会 (関東鉄道担当者を招聘) <ul style="list-style-type: none"> ・ 10 月 4 日に実施。3 年生 8 名が参加。 (2) 境町自動運転バス見学会 (実施主体 龍ヶ崎 MaaS 推進協議会とつちうら MaaS 推進協議会が共同開催) <ul style="list-style-type: none"> 10 月 31 日に実施。3 年生 6 名が参加。 <p>③ 「竜鉄サミット」の実施 (実施主体 関東鉄道、竜ヶ崎第二高等学校)</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) 第 2 回「路線バスの「映えスポット」を紹介しよう」 <ul style="list-style-type: none"> 2021 年 8 月 20 日実施予定で本校生徒 15 名が参加する予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大により中止。 (2) 第 3 回「高校生ガイドによる街歩きにより地域の活性化を図ろう」 (実施主体 龍ヶ崎市地域公共交通活性化協議会 竜ヶ崎第二高等学校) <ol style="list-style-type: none"> (1) 第 1 回は 2021 年 12 月 26 日に実施。1～3 学年の 12 名が参加。 (2) 第 2 回は 2022 年 3 月 26 日に実施。1、3 年生 6 名が参加。 					

10. 学習のながれ：

授業で公共交通の役割について学習した上で、希望者を募りフィールドワークを実施した（政治経済）。また、課題研究において、公共交通活性化の手だてとしてクラウドファンディングを想定し、企画書の作成を行った（課題研究）。校内で地域公共交通に関する関連行事への協力を呼びかけ、1～3年生の希望者でフィールドワークを行うとともに、学校主体の企画を実施した。実施内容は以下の通り。

① 『『竜鉄』の歴史を探る』ポスター展示会の実施

政治経済の授業と全学年に参加を呼び掛けるポスターを掲示して参加者を募った（以降の企画も同様の措置を行った）。マイレール意識向上と利用促進を図ることを目的としてポスターの展示を企画した。ポスター内容を成果物として冊子にまとめ、見学・来場者に配付した。

② 近未来公共交通システムに関する学習

(1) MaaSに関する学習会（関東鉄道担当者を招聘）

11月から試行される龍ヶ崎MaaSの概要説明を受けて、どのようなPR活動をしたらよいか意見を述べた。懇談会で出された意見は、関係機関が参加する龍ヶ崎MaaS推進協議会の企画・運営に生かされた。

(2) 境町自動運転バス見学会

土浦一高・龍ヶ崎一高附属中学校の生徒、流通経済大学の学生合わせて11名の生徒と、協議会関係者11名の計22名で、全国で初めて自動運転バスを定常走行している境町の自動運転バスを試乗した。生徒は、「自動運転バスとはどんな乗り物か興味があったので参加した。運転席がなく、コンパクトな車両でかわいらしかった。これから出てくる課題をクリアしながら未来の乗り物として普及していくのではないか。」「遠隔監視システムで安心・安全が確保されていることを知った。自動運転バスに乗車していると、街のみなさんが手を振ってくれて、バスが街に認知されていると感じた。」などの感想を述べた。

③ 「竜鉄サミット」の実施

(1) 第2回「路線バスの「映えスポット」を紹介しよう」

4月24日に実施した第1回サミット（生徒15名が参加）において関東鉄道、龍ヶ崎市役所が公共交通の現況を報告し、生徒との意見交換を行った。その際、本校生徒がSNSでの情報発信を提案した。これを受けて関東鉄道がInstagramを開設。解説初日の2021年8月20日に合わせて本校生徒15名が路線バスに乗車しSNSでつくば市内のPRを行う予定であった。

(2) 第3回「高校生ガイドによる街歩きにより地域の活性化を図ろう」

高校生が公共交通を利用しながら地域の歴史をガイドすることで、公共交通の利便性を認識し地域経済の活性化を図ることを目的として企画した。前に記した『『竜鉄』の歴史を探る』ポスター展示会を街歩きスケジュールに含めた。街歩き一般参加者を公募し21名の参加者。歴史ある遺構を案内し、参加者には御城印を発行した。また、2022年3月26日に2回目の街歩きを実施した。1年生4名が参加。前回の街歩きから、御城印に対する興味関心の高さを受けて、前回からルートを見直し、龍ヶ崎市が運行するコミュニティバスに乗車して国指定重要文化財の見学を新たに付け加え実施した。

※学習で使用した教材やワークシート、学習風景を撮影したビデオや写真、指導計画書などを添付して提出してください。

境町自動運転バス見学会に参加しました！（11/2 掲載）

10月31日(日曜日)、本校の生徒6名が龍ヶ崎 MaaS 推進協議会とつちうら MaaS 推進協議会が共同開催する境町自動運転バス見学会に参加しました。

MaaSとは、Mobility as a Serviceの略で「地域住民や旅行者一人一人のトリップ単位での移動ニーズに対応して、複数の公共交通やそれ以外の移動サービスを最適に組み合わせることで検索・予約・決済等を一括で行うサービス（国土交通省定義）」です。

今回は、2つの協議会に参加している学校のうち、土浦一高・竜ヶ崎一高附属中学校の生徒、流通経済大学の学生合わせて11名の生徒と、協議会関係者11名の計22名で、全国で初めて自動運転バスを定常走行している境町の自動運転バスを試乗しました。

一行は自動運転バスの起点となる「河岸の駅さかい」に到着後3班に分かれ、遠隔監視施設の見学、自動運転バス乗車、国立競技場や高輪ゲートウェイ駅の設計を手掛けた隈研吾氏が設計したS-Gallery、S-Labを見学しました。

生徒たちは、「自動運転バスとはどんな乗り物か興味があったので参加した。運転席がなく、コンパクトな車両でかわいらしかった。これから出てくる課題をクリアしながら未来の乗り物として普及していくのではないか。」「遠隔監視システムで安心・安全が確保されていることを知った。自動運転バスに乗車していると、街のみなさんが手を振ってくれて、バスが街に認知されていると感じた。隈研吾さんの建物が周囲の風景に溶け込んでいて違和感がなかった。すばらしい建物だった。」などと感想を述べていました。



遠隔監視システムの説明



自動運転バスがやってきました



自動運転バス運転手に質問



隈研吾設計建造物の見学（S-ブランド）

龍ヶ崎【鉄・城濃いめ】な街歩きを実施しました！（12/28 掲載）

12月26日(日曜日)、龍ヶ崎市地域公共交通活性化協議会の活動の一環として、龍ヶ崎第二高校が企画・立案した街歩きを実施しました。

当日は快晴だったもののこの冬一番の寒さの中、8:30 に関東鉄道龍ヶ崎駅改札付近に集合し、龍ヶ崎市民遺産認定第 14 号に指定されている「竜鉄」に乗車して街歩きをスタートしました。龍ヶ崎駅の待合室で「竜鉄」の歴史を紹介したのち、龍ヶ崎第一高校道祖神脇のレンガ塀、龍ヶ崎商店街を通り旧高松邸石蔵、旧諸岡邸レンガ塀を見学しました。龍ヶ崎小学校脇の仙台藩領龍ヶ崎陣屋跡を見学したのち、戦国時代に築城された龍ヶ崎城の遺構を見学しました。

本企画は、本校が地域に政策提言を行う組織である「りゅうがさきフューチャーセンター」が担当しました。生徒 12 名がスタッフとして関わり、受付、資料の配布、安全確認を行い、小野威人教諭が各見学地の説明を担当しました。また、参加者には本校で作製した蒸気機関車の画像を載せた参加証と「龍ヶ崎城跡」御城印が配られました。



市民遺産「竜鉄」に乗車（生徒撮影）



総勢 36 名が街歩きに参加しました（生徒撮影）



旧諸岡邸門塀の説明



仙台藩領龍ヶ崎陣屋跡の説明（生徒撮影）



龍ヶ崎城遺構見学の様子（生徒撮影）



当日参加者・スタッフの集合写真（生徒撮影）

龍ヶ崎【鉄・城濃いめ】な街歩き記録 (12/26 実施)



佐貫駅改札前で受付



市民遺産「竜鉄」に乗車 (生徒撮影)



竜ヶ崎駅待合室でのポスター説明



竜ヶ崎駅前ダーリントン製レールの説明



総勢 36 名が街歩きに参加



竜ヶ崎一高隣 道祖神社脇レンガ塀の説明



旧高松邸石蔵内部で竹灯籠制作の説明 (生徒撮影)



旧諸岡邸門塀の説明



移動風景（生徒撮影）



仙台藩領龍ヶ崎陣屋跡の説明（生徒撮影）



竜ヶ崎二高の歴史を説明（生徒撮影）



龍ヶ崎城遺構の説明（生徒撮影）



龍ヶ崎城遺構見学の様子①（生徒撮影）



龍ヶ崎城遺構見学の様子②（生徒撮影）



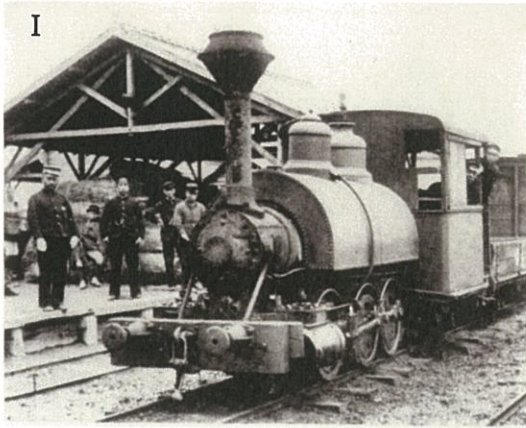
当日参加者・スタッフの集合写真（生徒撮影）



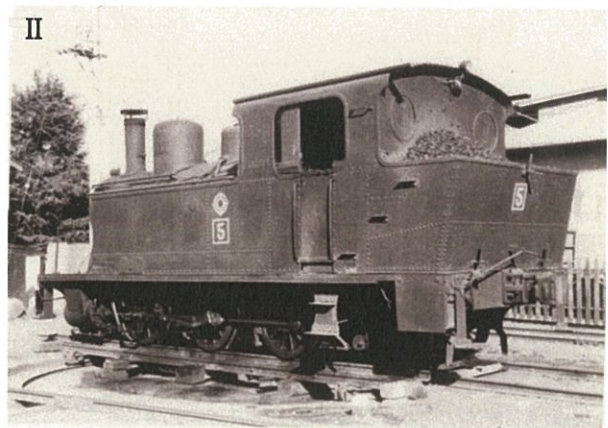
街歩き終了後の生徒との打合わせ（生徒撮影）

龍ヶ崎の歴史遺産 I-1 《市民遺産【認定第14号】 関東鉄道竜ヶ崎線》

「竜鉄」の歴史 《龍崎鉄道から関東鉄道まで》



I
龍崎鉄道の原点である1号機関車



II
転車台に載る5号機関車。車体側部の社紋は関東鉄道のもの



III
ディーゼル機関車 (DB 11)



IV
現在主力として走るキハ 2000 形

《解説文》

1895 (明治 28) 年に衆議院議員兼醸造業経営の倉島松雄が、藤代 - 龍ヶ崎間を馬車鉄道で結ぶ申請を行った。3年後の 1898 (明治 31) 年に認可され、1899 (明治 32) 年、龍崎鉄道株式会社が設立された。当初は馬力による輸送を計画していたが、軌間蒸気鉄道のほうが安定した動力を得られ、かつ、メンテナンス等の面でも優れていたことから、馬車鉄道ではなく小型蒸気機関車による軽便鉄道での運行とした。また、ルートは安価で、最短の佐貫～龍ヶ崎間とした。1900 (明治 33) 年に佐貫～龍ヶ崎間 4.5 キロが開業する。その後は稲敷郡柴崎村方面への延伸計画や、のちに合併する常総線との佐貫での接続要請を行う動きなどがあったものの実現しなかった。40 年以上にわたり好機や低迷期がありながらも走り続けてきた龍崎鉄道であったが、太平洋戦争時の統合政策により 1944 (昭和 19) 年に鉾田線 (石岡～鉾田間) のちに関東鉄道と合併後鹿島鉄道として分社化し 2007 (平成 19) 年廃止) を持つ鹿島参宮鉄道に吸収され、龍崎鉄道は解散した。戦後は鹿島参宮鉄道竜ヶ崎線として、首都圏に近いことやバス事業をうまく組み合わせたことで、鉾田線よりも安定した収支をみせた。鹿島参宮鉄道は常総線 (取手～下館間) と筑波線 (土浦～岩瀬間) 関東鉄道設立後筑波鉄道を分社化し 1987 (昭和 62) 年廃止) を持つ常総筑波鉄道と合併し、1965 (昭和 40) 年、2 社は経営拡大のため合併して現在の関東鉄道株式会社となった。【写真提供】 I・II・III (関東鉄道)、【写真撮影】 IV (黒澤 瑛史)

龍ヶ崎の歴史遺産 I-2 《関東鉄道竜ヶ崎線ワンマン運行 50 周年》

《ワンマン化直前の風景》

1971 (昭和 46) 年 8 月 1 日、「竜鉄」では車掌乗務を省き日本初のワンマン運行に踏み切った。ワンマン化に対する東京陸運局の最初の認可は 1 ヶ年、次いで 2 ヶ年の期限付きであった。1974 (昭和 49) 年 7 月 1 日以降に無期限許可となり、今日に至る。

さて、このページの画像を見てみよう。キハ 5123 の運転席上部に「ワンマン」の表示が認められる。ところが、車両最後尾には左腕に腕章を巻いた車掌の姿が確認できる。この写真は、福田均氏により 1971 (昭和 46) 年 7 月 29 日に撮影された。すなわち、「竜鉄」がワンマン化する直前の画像であり、「ワンマン」の表示と車掌の姿が同時に収まる貴重な記録といえるだろう。

なお、1988 (昭和 63) 年 1 月 29 日には、「我が国で初めて旅客列車のワンマン運転を実施し経営改善に大きく貢献した功績」により、社団法人日本鉄道協会から表彰を受けている。



佐貫駅付近を通過するキハ 5123 (1971 年 7 月 29 日 福田 均氏撮影)

馴馬城について



出典：馴馬城社案内板（歴史民俗資料館）



現況

《解説》

城址は、龍ヶ崎城社より西北 1.5 キロメートルのこの辺り一帯と考えられる。

馴馬の集落から南南東に延びる大地の先端は、歴史民俗資料館が建つ山王久保の谷を挟んで二股に分かれている。この南側の細い台地を利用して、堀切で区切るという典型的な構造をしている。

文献では、南北朝時代に南朝方の拠点の一つで、暦応 4 年＝興国 2 年（1341）10 月、「河内郡馴馬楯等引退」とあり、城主が誰であったかは不明であるが、北朝方から攻撃されたことがわかっている。三年後の康永 3 年＝興国 2 年（1344）にも、南朝方の武将、春日顕国が立て籠った「馴馬沼田城」が、穴戸朝里ら北朝方の常陸軍勢に政略されていることから馴馬城に比定されている。

茨城県は、昭和 15 年（1940）4 月 5 日、南側の台地にある小高い丘一帯の私有地を県指定史跡にしている。

城跡の遺構は、この谷が空堀であり、前方の道路が左右の台地をつなぐ土橋となっている。全体としては明瞭な移行が少なく、現存する部分を見るかぎり、古風な形式をとどめ、南北朝の貴重な城跡である。うである。（馴馬城社案内板の表現を一部改めて作成）

来迎院多宝塔（馴馬町 2362）



出典：茨城県教育委員会 HP



出典：龍ヶ崎市 HP

《解説》

多宝塔の解説板には次のように記されている。

「この塔は供養塔とも呼ばれるが、正しくは多宝塔と称し、大日如来の本体としている。

（略）当地領主土岐治英は、この境内の東方にある県指定文化財の沼田城（1308 年）跡に眠る、南朝の征夷大將軍春日顯国以下、戦に敗れた幾多の戦死の靈魂の冥福供養のため、さらには万民安泰のため、後に奈良天皇の御祭所に奉し、如来の加護を祈って、弘治 2 年（1556 年）、この塔を建立したもので、当山本寺の逢善寺第 15 代定珍和尚によって開基された」

建立の時期は、疫病が流行して村民が苦しんでいる時代だったとも言われています。

しかし、塔の最上部にある宝珠には「弘治 2 年に城主・土岐治英がこの塔を修築し、そのとき、治英の一族・家臣や僧、番匠、火事（※鍛冶の誤りか？）などの職人たちが多数参加した」ことが刻まれています。

このことから、建立はもっとさかのぼると思われま。

仏事由緒の資料では「この建築物は、仏教の神髓経たる妙法蓮華教の解説に準じて造営されたもので、すなわち建物自体が多宝如来様の尊像である。中心に釈迦如来像の尊像が納められてあり、この大世界の本地仏と垂跡仏とが一緒に祀られている。したがって、この建物の全貌を礼拝すれば、功德莫大にしていかなる願いも叶う」としています。

一般的には「多宝塔は、法華教見宝塔品の説によって、釈迦、多宝二仏が並座する塔の意で、二重の宝塔の形式を言う」とされています。

この地方ではほとんど遺跡を見ない多宝塔方式で、形式上から、また建立年代の古さからも、この地方においてはきわめて貴重な存在です。

塔そのものは三間多宝塔であり、あまり大きくありません。平成 13 年 3 月に改修工事が完了し、当時の姿が再現されました。多宝塔は、信仰の役割はもちろん、当時この地方は若柴岡見領の隣、土岐領の西端にあっていたことから、領域の目印の役割も果たしていたともいわれています。（出典：龍ヶ崎市 HP を一部改めて作成）

旧諸岡家住宅煉瓦門塀及び旧諸岡邸



出典：龍ヶ崎市 HP



出典：「NPO法人龍ヶ崎の価値ある建造物を保存する市民の会」ホームページ

《解説》

このレンガ門・塀は、龍ヶ崎の実業家諸岡良佐もろおかりょうすけが明治 43（1910）年頃、故郷に戻った際に自宅とともに建てたとされる門・塀の一部です。元の塀の長さは 35 メートルを超え、重厚な門構えから、龍ヶ崎を代表する名士の邸宅を感じさせます。

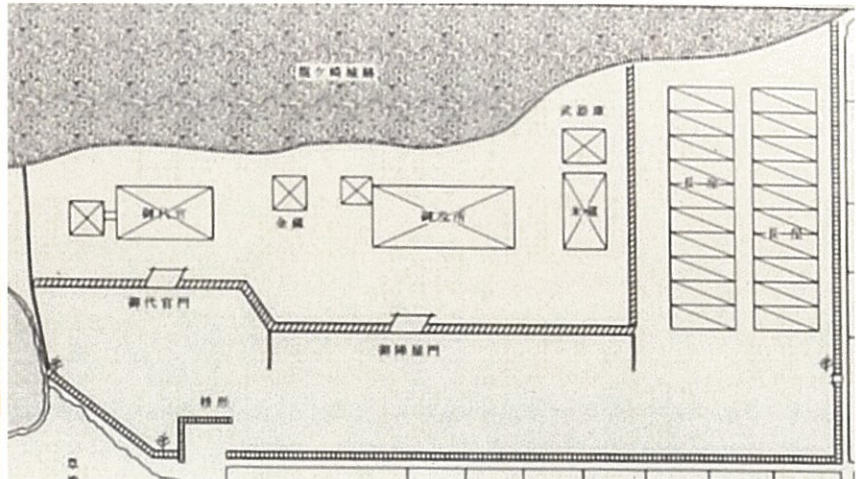
平成 18（2016）年、諸岡家の意向により解体を予定していましたが、無くなってしまふことを惜しんだ市民が「赤レンガ保存実行委員会」を立ち上げ、保存活動を行いました。委員の寄付や賛同者による募金に加え、東日本鉄道文化財団や龍ヶ崎市「市民協働提案事業」の助成金を活用して、平成 27（2015）年に現在地へ移築されました。

※諸岡良佐は、第 11 代の龍ヶ崎町長で、龍ヶ崎銀行頭取や現在の関東鉄道竜ヶ崎線の前身である龍崎鉄道株式会社の第 6 代社長を務めました。

仙台藩領龍ヶ崎陣屋跡・「仙臺領」石柱



出典：龍ヶ崎村絵図（諸岡賢三家蔵）



出典：龍ヶ崎小学校「仙台藩龍ヶ崎陣屋跡」揭示板より抜粋

《解説》

仙台藩龍ヶ崎領とは、慶長 11（1606）年 3 月 3 日、江戸幕府から仙台藩主伊達政宗に与えられた常陸国河内郡龍ヶ崎村を中心とした河内郡 13 か村・信太郡 13 か村の計 1 万石余りの村々の総称である。龍ヶ崎に陣屋が置かれた。この後、龍ヶ崎村は慶応 4（1868）年の戊辰戦争によって、代官をはじめとした陣屋役人が当地を離れるまで、仙台藩支配が続いた。

当地が仙台藩領となる以前は、土岐氏が龍ヶ崎城に拠って支配し、その後は芦名義広（盛重）の支配を受けた。このような経緯から、当初は東北の外様大名に対する備えとして江戸幕部直轄領として支配されたが、その後、関ヶ原の戦いで徳川方として戦った伊達政宗に与えられた。

寛文 3 年（1663 年）8 月、幕府による新利根川の開鑿・谷原新田開発のために龍ヶ崎村を除く河内郡は召上げられ、筑波郡 4 か村と替地になった。しかし、陣屋は幕末まで龍ヶ崎に置かれ、仙台藩龍ヶ崎領の政務はこの陣屋で行われた。

「常州龍ヶ崎陣屋絵図」によれば、龍ヶ崎陣屋には、御陣屋門、御代官門、根町入口御門があり、根町通りに面して代官とその配下のものと見られる屋敷などが見られるほか、別の図面では龍ヶ崎城の遺構の一部と見られる堀（陣屋池と呼ばれる）が記されている。

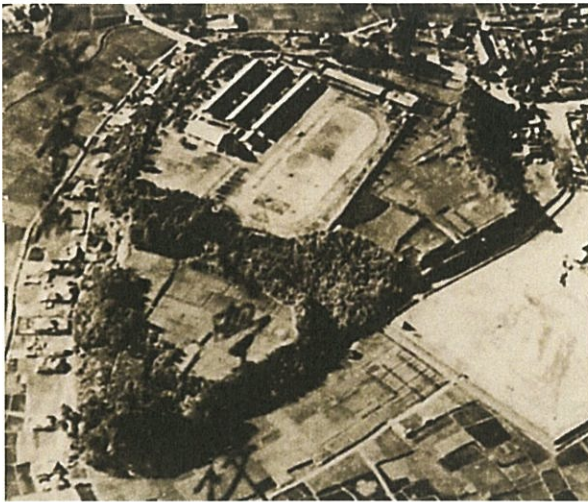
左の「仙臺領」と刻まれた石柱は、龍ヶ崎内の知行地の四隅に領域を示すために設置された標柱と考えられる。古老の話によるとそのうちの一基は砂町の東端に建てられていたという。

現在残っているのは、龍ヶ崎市歴史民俗資料館に保存されている二基のみである。この石柱は、かつて上町にあった龍ヶ崎尋常小学校の通用門に使用されていたが、小学校が根町に新築されて学校跡地が公園として整備されたとき、その地に保存されることとなった。現在は歴史民俗資料館に展示されている。



出典：龍ヶ崎市 HP

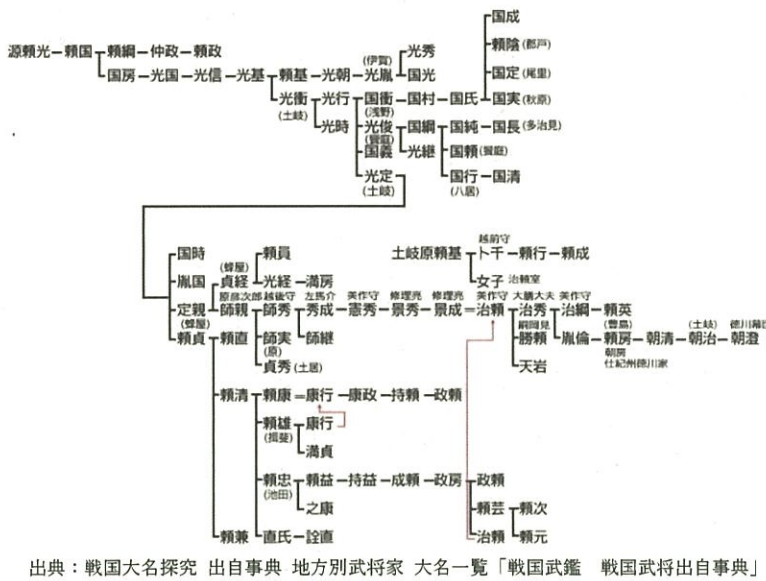
龍ヶ崎城×竜ヶ崎二高 《それぞれの成り立ち》



昭和 12 年 12 月 8 日撮影 (出典：『写真集 龍ヶ崎 ふるさとの今と昔』)



竜ヶ崎第二高等学校 (イラスト：武田亜沙子)



《解説》

戦国時代、常陸国の南部江戸崎に勢力を振るった土岐氏は、清和源氏頼光流で美濃守護として有名な土岐氏の一族である。土岐光定の子蜂屋定親の子師親が原孫次郎を名乗り、その流れが土岐原氏を称したものである。師親の次男師秀の子左馬助秀成のときに、関東管領上杉憲方に従って遠く関東に下向し、常陸信太荘に入部した。この土岐原秀成が江戸崎土岐氏の初代である。

永禄3年(1561)秋、上杉謙信が関東に出陣してきた。謙信は関東の諸将に参陣を求め、関東各地の大名・領主たちは謙信の旗の下に続々と参集した。しかし、そのなかに当主であった土岐治英の名を見出すことはできない。

しかし、上杉氏対北条氏という対立・抗争の枠組みができ上がってくると土岐氏も新たな対応を迫られた。治英は、永禄 11 (1568) 年、龍ヶ崎に築城し次男・胤倫を配し、土岐領を分割して江戸崎城を中心とした地域と龍ヶ崎城を中心とした二つの行政単位を設定し、土岐領の安定的な支配を目論んだのである。

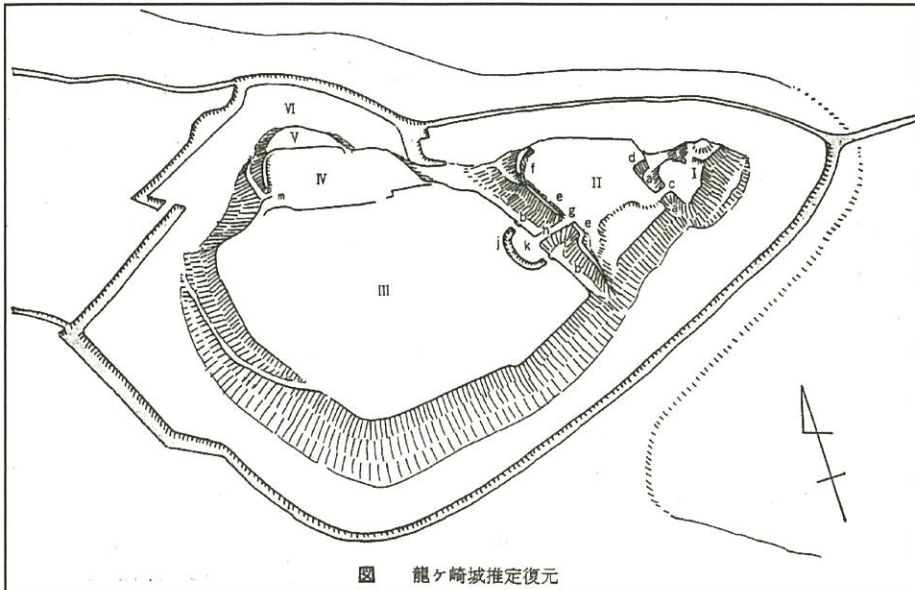
治綱の代になると土岐氏は北条氏の傘下に入り、北条重臣の松田氏から諸々の局面で指示を受けるようになる。ところが、このような状況下で、豊臣秀吉の関東侵攻を迎えることになる。そして、天正 18 年 (1590) 五月、江戸崎・龍ヶ崎両城は、豊臣方の軍勢によって攻め落とされた。

茨城県立竜ヶ崎第二高等学校 (通称竜ヶ崎二高) は、大正 5 (1916) 年、生徒定員 150 名、3 年制の龍ヶ崎町立龍ヶ崎女子技芸学校として開校した。大正 9 (1920) 年には 4 年制の龍ヶ崎町立実科高等女学校となり定員が 200 名となった。1 年後には稲敷郡立となり、2 年後の大正 12 (1923) 年には県に移管して茨城県立龍ヶ崎実科高等女学校に昇格、現在の「龍ヶ峰」に校舎を移転し定員が 400 名に倍増した。裁縫や家政教授を主体とする実科高等女学校であったが、昭和 2 (1927) 年、実科を廃止し本科課程を置く龍ヶ崎高等女学校となった (4 年制、定員 400 名)。

戦後、昭和 23 (1948) 年 4 月に新制竜ヶ崎女子高等学校となったが、翌年、男女共学の竜ヶ崎第二高等学校と改称された。全日制普通科 (定員 450 名)、家庭科 (定員 150 名)、商業科 (定員 150 名) の課程を持ち、初めて男子生徒 5 名が商業科に入学した。現在は、普通科のほかに商業科・人間文化科の専門学科 2 学科を持つ定員 480 名で、卒業生が 21,000 人を超える伝統校である。

龍ヶ崎城の遺構と城下町

龍ヶ崎城推定復元図



《解説》

富士見坂（南西斜面を迴って南側に出る坂道）は、「大手」と伝えられ、城と同時に存在したと考えることも可能である。

また、図のVの東端に登り、曲輪IVの中を通過して曲輪IIIに至る道が見える。これも古いようである。防御上は、これを大手道として使用したほうが良いと思う。また、現在、曲輪IVの西側斜面に残っている坂道は、城の遺構とみて間違いあるまい（見学）。その登り切ったところには虎口

mがあり、そこから曲輪IVのへりに沿って低い土塁が残っている（見学）。この附近が、遺構の最もよく残っているところである。

龍ヶ崎城の構造（縄張り）には、全体に一貫性があり、また虎口gの構造など、成熟した築城理論に基づいていることが認められる。規模・工事量の点でも、市内では最大級の城であったといえるであろう。築城者は土岐氏で、芦名氏が若干手直しを加えたことも考えられる。築城時期は16世紀後期である。

龍ヶ崎城には城下町があった。図は江戸期の龍ヶ崎の町場の復元図であるが、8つの町のうち田町と新町を除いた6つの町の部分が、土岐氏あるいは芦名氏の時代に作られたようである。城と密接な関係にあったのは根町で、ここに侍が集住していたようである。これに対し、米町から砂町にかけての部分は、街道に沿って発展した宿場町のようなものであったと思われる。なお、根町のはずれと、砂町のはずれに戸張（外張）があった。戸張とは木戸や土塁など出入口をかためる警備施設のことである。

町場は主に自然堤防上を通る街道に沿って形成された細長い町場で、城との一体性が乏しい。また町の区画も侍町・町人町と整然と分けられてはいなかったようである。

龍ヶ崎城下略図

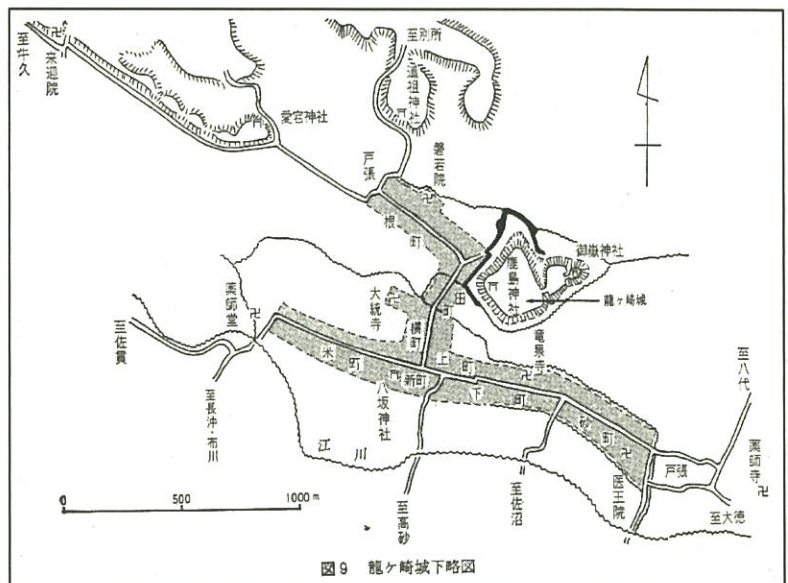


図9 龍ヶ崎城下略図

（『龍ヶ崎の中世城館跡』（龍ヶ崎市教育委員会）を一部改めて文章を作成）